The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ロシア国家の起源
Author(s)	國本, 哲男
Citation	大阪大学, 1973, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/30966
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【2】

氏名・(本籍)	國本哲男（くにもと てつお）
学位の種類	文学博士
学位記番号	第 2984 号
学位授与の日付	昭和48年12月27日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**ロシア国家の起源**
論文審査委員	(主査) 教授 豊田 堯
	(副査) 教授 岡部 健彦　教授 山田 信夫

論文内容の要旨

「これは、どこからルーシの国が出たか、だれがキーエフにおいて初めて公として治め始めたか、そしてどこからルーシの国が始まったかの、すぎし年月の物語である」。

ロシアに現存する最古の年代記である『すぎし年月の物語』（一名『ロシア原初年代記』）（ラヴレーンチー本）は、このような書き出しで始まっている。「ルーシの国」(ゼムリャー）には「土地」、「民族」の意も含まれているので、ロシアの民族と国家の起源については、11—12世紀からすでに論争をはらみながら、さまざまな説が提出されている。年代記は修道僧の手によって編集されたため、そこにはキリスト教的歴史観（神意の実現）によって支配者の正統性を根拠づけようとする意図が明らかであり、「政治的・宗教的歴史書」としての性格が強い。本論は、おもに「政治」にかくされた「歴史」を回復することを目的としており、年代記の諸本の比較検討によって伝説の背景を探り、考古学、言語学などの資料によって、それを裏付け、ロシア民族と国家の起源、および882年における「古ルーシ国」の成立の問題の解明を試みた。

ここでは現在ソビエト考古学界の指導的立場にあるルィバコーフの年代記解釈と、ロシア国家起源論を手がかりに、最近のソビエトの学界の動向を紹介しながら、一つの仮説を組み立てたが、古代史の例にもれず論証に「決め手」を欠き、諸説相乱れて、論争はまだ決着を見ていない状態である。

第Ⅰ章では『すぎし年月の物語』の成立にかんする研究史を、シャーフマトフの業績を中心に紹介し、第Ⅲ章ではロシア国家の起源について、グレーコフ、ルィバコーフ、ブラィチェーフスキーの「内的要因論」に対する考古学者の慎重論を紹介した。

Ⅱ、Ⅳ—Ⅻ章はスラヴ民族の原住地、6—9世紀の移動と再編成、国家の成立を理解したものであるが、要約すれば、次のようになる。

言語考古学的研究によって、BC1千年紀後半にポレーシェ・ヴォルィニ（ドネープル中流・西ブー

グ）に住んでいたスラヴ人は、6世紀には北のヴェネド（ヴェネド式土器）、南のスクラーヴェニ（プラハ・コルチャーク式土器）、東南のアント（ペニコーフカ式土器）に分かれるが、それまでのスラヴ人の移動については不明なところが多い。

6世紀からバルカン侵入が進む一方、アヴァール人の攻撃を受けて、アント人は壊滅状態に陥いりスクラーヴェニ人に同化吸収される。東スラヴ諸種族のうち、ポリャーネ、セヴェリャーネ、ヴォルィニャーネ、ドレヴリャーネ、ドレゴーヴィチはスクラーヴェニ人から形成され、やや遅れて、ドネーストル上流のリャヒ（ポーランド）人の隣接地からヴャーチチ、ラジーミチが東北進してドネープル左岸に住む（スクラーヴェニ人）。このように、中部・南部はプラハ・コルチャーク系文化種族によって形成されている。

これに対して北部のクリヴィチー、ノーヴゴロド・スロヴェネは、ヴェネド人の子孫である。彼らはヴィスラ沿岸からネーマン上流のバルト人の間を通過して、フィン人の居住地であるプスコーフ、ノーヴゴロト地方に東北進した農民である。一方、バルト海南岸のポメラニア、リューゲン島のスラヴ人は海洋民族「ルーシ」であり、8世紀末からラードガを拠点にバルト・ヴォルガ水路において東方貿易に従事した。彼らの一部は9世紀初期にドネープルを南下してキーエフのポリャーネ族をハザールへの朝貢から解放し、「ルーシ（ロス）のハカン」を称し、ビザンツへ友好使節（スウェーデン人）を派遣し、860年にはコンスタンティノポリスを急襲し、キリスト教を受けいれている。このハカンがジール（および彼を助けたアスコーリド）であろう。

やがてバルト・ヴォルが水路へはヴァリャーグ（ノルマン）人が通商の利を求めて参加する。862年のリューリク招致伝説はそれを反映している。おそらくそれはクリヴィチー、ノーヴゴロド・スロヴェネ、ルーシ、フィン人に対する征服であったと思われる。リューリク、オレーグによって北の地方を統一したヴァリャーグは、ドネープルを下り、南のスラヴを統一していたルーシ（バルト・スラヴ人）の拠点キーエフを占領し、オレーグはルーシの大公を称して南北を統一し、「古ルーシ国」が成立する（882年）。その後起源を異にする南北の東スラヴ人も政治的求心力によって一つのまとまった民族として形成されるが、ルーシの歴史におけるキーエフとノーヴゴロドのその後の激しい対立はやはりこういった種族起源の相違を反映していると思われる。なお、今後の考古学の成果によって、この仮説をさらに検討することが必要である。

論文の審査結果の要旨

本論文は、緒論「『すぎし年月の物語』の表題」、第Ⅰ章「『すぎし年月の物語』の成立」、第Ⅱ章「スラヴ人の起源」、第Ⅲ章「ロシア国家の起源をめぐる問題」、第Ⅳ章「6世紀のドナウのスラヴ人」、第Ⅴ章「アント人の消滅」、第Ⅵ章「東スラヴ人の分散とルーシ国」、第Ⅶ章「キー、シチェーク、ホリーフ伝説」、第Ⅷ章「中部・南部の東スラヴ人」、第Ⅸ章「北部の東スラヴ人」、第Ⅹ章「バルト・ヴォルガ水路のルーシ」、第Ⅺ章「ヴァリャーギ招致伝説とその背景」、第Ⅻ章「古ルーシ国の成立」の13篇よりなる。

12世紀の初めに修道僧によって、諸々の素材から編集されたロシア最古の年代記「すぎし年月の物語」―わが国の古事記、日本書紀にもあたろう―の記事を手がかりに、その分析を通じ、「ルーシ国」の起源、その形成過程、最初の統治者＝国王（公、クニャージ）の出現、つまり古代ロシア国家の成立とその発展を究明しょうとしたものである。

古代において宗教は、人間生活のあらゆる面を規定するものであるから、歴史も政治も宗教性をまとわざるをえないのであるが、とくに皇帝が政治・宗教（ギリシァ正教）両方面の首長として君臨するビザンツ帝国の影響を多分に受けて成立したと考えられるルーシ国において、その国王たる公の庇護下にある修道院の僧侶によって編集された『すぎし年月の物語』は、公の利害と政治的に堅く結びついていたが故に、公の支配者としての正統性を根拠づけようとしたのは、当然考えられることであった。したがってこの年代記は、政治的宗教的歴史書であったといわねばならない。すでにわが国でも、この年代記の「宗教性」を指摘して、その面から綿密な分析が行われたが、厳正な史料批判に基づいて、この年代記のもつ宗教的政治的潤色のもとにかくされた歴史そのものを摘出するまでには至らなかった。本論文では、この年代記に対する文献学的研究に基づき、ビザンツの史料の分析、言語学や考古学の最新の成果の上に立って、現在のソビエト考古学・古代史学界を代表するルィバコーフの年代記解釈、ロシア国家起源説、成立説に対する批判を行うとともに、日本人として一つの仮説を提唱しようとしている立場が述べられている（緒論）。

『すぎし年月の物語』の如き古書は、おしなべて写本により伝承されてきた。したがってどの定本に準拠するかを決定することは、本格的研究を進めるための大前提である。本論文では、18世紀以来展開されてきたロシア・ソビエトにおける年代記研究発達史を概観した上で、とくにシャーフマトフの文献学的分析によって復元された「最古集成」を紹介し、以下の立論の前提としようとしていることが明らかにされている（第Ⅰ章）。

ロシア国家の建設に関しては、従来ソビエト史学界においても「ノルマン説」と「反ノルマン説」とに分かれ、論争がつづけられてきた。前者は、ロシア国家を建設したルーシ人は、ヴァリャーグ人と呼ばれたノルマン人であると主張し、革命前からポクローフスキーに至るロシア・ソビエトの学者欧米諸国およびわが国の研究者に支持された有力な学説である。これに対し後者は、ヴァリャーグ人はノルマン人であるがルーシ人は東スラヴ人とする説である。つまりこの学説は、ノルマン人の征服以前にドネープル中流域の東スラヴ農業社会で、すでに生産力の発展に基づいて階級が発生し、国家が成立したとするものであるが、それは前の「征服説」に対し、内的要因に重点を置いた一種の愛国説であり、ソビエトの学者、とくにルィバコーフによって主張された。そしてこの古代国家は、学者により、あるいは「アント国」若しくは「ルーシ国」と呼ばれたが、この「愛国主義」的学説に対し最近考古学者から慎重な発言のあることが述べられている（第Ⅲ章、第Ⅳ章）。

というのも考古学的には6世紀以前のスラヴ遺跡については不明な点が多く、スラヴ民族の起源について定説は存しないからである。フィーリンなどの言語考古学的研究の成果に徴すると、紀元前5世紀～紀元前後には、スラヴ人はドネープル中流と西ブーグの間のポレーシェ、ヴォルィニを占めており、ザルービンツィ文化のにない手であったと考えられる（第Ⅱ章）。

6世紀にスラヴ人は、北のヴェネド人（ヴェネド式土器）と南のスクラヴェニ人（プラハ・コルチ、

ャク式土器)、東南のアント人(ペニコフカ式土器)に分かれた。ビザンツの史料、考古学的資料によれば、アント人は牧畜、農業を生業としており、種族の全成年男子は戦闘と集会に参加し、捕虜のみを一定期間奴隷にしている。首長(レクス)は軍事的統率者として力をもっていたが、強固な種族同盟ないしは国家の存在はまだ認められず、いわゆる「軍事的民主制」の段階にあった。6世紀からビザンツ領に侵入を始めるが、やがて同帝国と同盟関係にはいった(第Ⅳ章)。

560年以後アヴァール人の迫害を受け、とくに602年の侵略による打撃以後はアント人の名が消滅している。アントの居住地では7世紀からペニコフカ式土器が消え、ルカ・ライキ式土器に代っているが、それはコルチャク式土器から発生したものであり、そのことは潰滅状態に陥ったアント人が、やがて移動してきたスクラヴェニ人に同化吸収され、種族群としては消滅したことを物語っている。したがって、アント人は東スラヴ人の先祖ではなく、9世紀の古ルーシ国の成立には参加していないことが論証されている(第Ⅴ章)。

6世紀の東スラヴ種族同盟の存在を主張するルィバコーフは、年代記のキー伝説を、その論拠にしている。この記事はキーエフの町を建設した3人兄弟の牧歌的な伝説と、かれらがビザンツ皇帝から栄誉を受け、さらには遠征を行った英雄叙事詩的伝説からなっている。しかし、両者は別の伝説であり、後者のような事実があったにしても、おそらくはアント人ないしはスクラヴェニ人の伝説が後にキーエフにもたらされたものであろう。この伝説を根拠に、6世紀からキーエフを統治したキー王朝の存在を認めることはできない(第Ⅶ章)。

『すぎし年月の物語』では、東スラヴ諸種族はドナウから移住したことになっており、ラジミチ族とヴャチチ族だけが遅れてリヤヒ(ポーランド)人から出たとされている。東スラヴ人は種族の構成において南(スクラヴェニ)と北(ヴェネド)から出た2つの種族群から成り立っている。シャーフマトフ以来この二元説を主張する者は多いが、最近の言語学(地名学)、考古学の資料によれば、次のようになる。

1)ヴェネド系—クリヴィチー、ノヴゴロド・スロヴェネ

2)スクラヴェニ系—ポリャネ、ドレヴリャネ、ドレゴヴィチ、ヴォルィニャネ

ラジミチとヴャチチはリャヒ人からではなくリャヒ人に隣接するドネストル上流から遅れて東北進したものである。これに対して、クリヴィチーとノヴゴロド・スロヴェネはヴェネド人の子孫で、ヴィスラ沿岸からネーマン上流のバルト人の間を通過して、フィン人の居住地であるプスコフ、ノヴゴロド地方に東北進した農民である。このうちラードガ周辺の住民はバルト海南岸(ポメラニア、リューゲン島)のバルト・スラヴ人にきわめて近い(第Ⅷ、第Ⅸ章)。

バルト・スラヴ人は海洋民族であり、古銭学の研究によると、8世紀末からラードガを拠点に、バルト・ヴォルガ水路において、アラブとの東方貿易に従事した。かれらこそ「ルーシ」人であり、その王はハカンと称し、陸上を移動したスラヴ人を襲撃して奴隷とし、遠くバクダードにまで通商に出かけている(第Ⅹ章)。

年代記の862年の「ヴァリャーグ招致伝説」を分析すると、ルーシとヴァリャーグは対立した種族であり、ノヴゴロドからキーエフに下ってそこを支配したアスコリドとジールはリューリクとは関係のないことがわかる。また古銭の分布と考古学の遺物は、9世紀後半からヴォルガ水路でノルマン人が

活躍し始め、10世紀には一部では数の上でスラヴ人と同じであったことを証明している（第XI章）。

以上のことから次のように結論することができるであろう。ルーシであるバルト・スラヴ人は9世紀初期にドネープルを南下してキーエフのポリャーネ族をハザールへの朝貢から解放し、キーエフ周辺は「ルーシ」と呼ばれるようになった。その王「ルーシのハカン」は839年にビザンツへ友好使節を派遣し、860年にコンスタンティノポリスを急襲してキリスト教を受けいれている。このハカンがジール—およびかれを助けたアスコリド—であろう（バルト海からラードガ、キーエフへと下った第一陣）。

やがてバルト・ヴォルガ水路へは、ヴァリャーグ人が通商の利を求めて参加する。ルーシ＝バルト・スラヴ説を主張する一部の学者は、ヴァリャーグをもバルト・スラヴ人としているが、先に述べたように、ヴォルガ水路のノルマンの遺跡分布から見て、ヴァリャーグはノルマン人であると考える。862年の招致伝説は、第2陣としてのノルマンの侵入を反映している。リューリク、オレーグによって北の地方を統一したヴァリャーグはドネープルを下り、キーエフのルーシ（バルト・スラヴ人の征服国家）の王アスコリドを殺し、ここを占領する。ルーシの地を占めたヴァリャーグもルーシと呼ばれオレーグは「ルーシの大公」を称し、ここに東スラヴ世界の南北を統一した「古ルーシ国」が成立する（882年）（第XII章）。

東スラヴ人はヴェネド系とスクラヴェニ系の二つの種族群から形成された。やがて統一国家の政治的求心力によって一つの民族にまとまるが、古ルーシ国の歴史におけるキーエフとノヴゴロドのその後の激しい対立は、このような民族起源の二元性に由来していると思われる。

以上は本論文の概要であるが、この方面の研究は、ロシア・ソビエトでは国体学の研究でもあるが故に二百有余年の歴史をもち、そのうず高い研究堆積は、異国の研究者のゆくてを固く阻んでいる。その上ソビエトにおいてスターリンの死後、研究の新展開したことが論文中で指摘せられているがなおある種の制約が存在することは否定できない。しかしながら同時に研究者たる者はなに人も、ソビエト史学の成果を無視しては、自己の研究をおし進めえないという矛盾に立たされているのである。そこで本論文の作成にあたり、筆者がぼう大なロシア・ソビエト史学界の研究を尽く渉猟咀嚼していることはいうまでもないが、その立論にあたっては、できるだけ政治的意志の加わらない考古学、古銭学、言語考古学（地名学）等を足場にし、さらに同時代のビザンツ側の史料等を加え、あくまで客観的で精緻な論証を積み重ねていった態度は激賞されねばならない。なお『すぎし年月の物語』の定本決定や、論文中に引用されたテキストに対しては、ソビエトの学者の説を鵜呑みにせず、自らの眼で、文法的にもいちいち検討を加え、詳細な本文批判を加えている真摯な学的態度は一層論文の価値を高からしめている。

このような慎重な手続きと論理構成のもとに提出された結論は、ソビエトのみならず世界（日本を含めて）において定説となっている通説（ノルマン説）や、さらにその後ソビエトで展開された東スラヴ説をくつがえすのみならず、一部のソビエトの学者によって主張されているバルト・スラヴ説をも修正するものである。したがって本論文公刊の暁には、本格的な研究が開始されて日なお浅いわが国のロシア史学界に対し、今後の研究に不滅の光明を投じるのみならず、世界の学界に対しても、日本の学者として多大の貢献を為すことは疑いない。そして現在百家争鳴を続けつつあるわが国の「邪馬台国論争」にも、学的方法論において一大指針を与えることと思われる。

しかしながら敢えて望蜀の言を呈すれば、本論文はこのように横の普遍性において完璧であったが論文の末尾に「キーエフとノヴゴロドのその後の対立抗争の激しさは、この南北の種族の起源のちがいが大きく作用しているといえる」とあるだけで、その後のルーシ国の展開から回顧して自己の所説を裏打ちしていない点が指摘される。キーエフやノヴゴロドに原住する被征服民の政治的社会経済的情勢や階級分解の状態、さらに種族を異にする征服王朝の支配やキリスト教の受容によるその後の展開等の問題に触れられていない。これらを明らかにしてキーエフとノヴゴロドの対立を明らかにし、自己の見解（キーエフ＝バルト・スラブ、ノヴゴロド＝ノルマン説）を一層鞏固にすることが、今後に残された課題であろう。しかしなにぶん本文だけで700枚（四百字詰原稿用紙）におよぶ浩瀚なものであり、今回はそれまで言及できなかったのかも知れないが、それにしても縦の普遍性の欠如は惜しまれるのである。

とはいえその客観的にして慎重な理論構成により、日本の学者としてはじめて国際的水準に達した学的業績をうち立てたことや、内外の学界に対する貢献を思い、本論文は学位請求論文として十分価値あるものと認定する。